

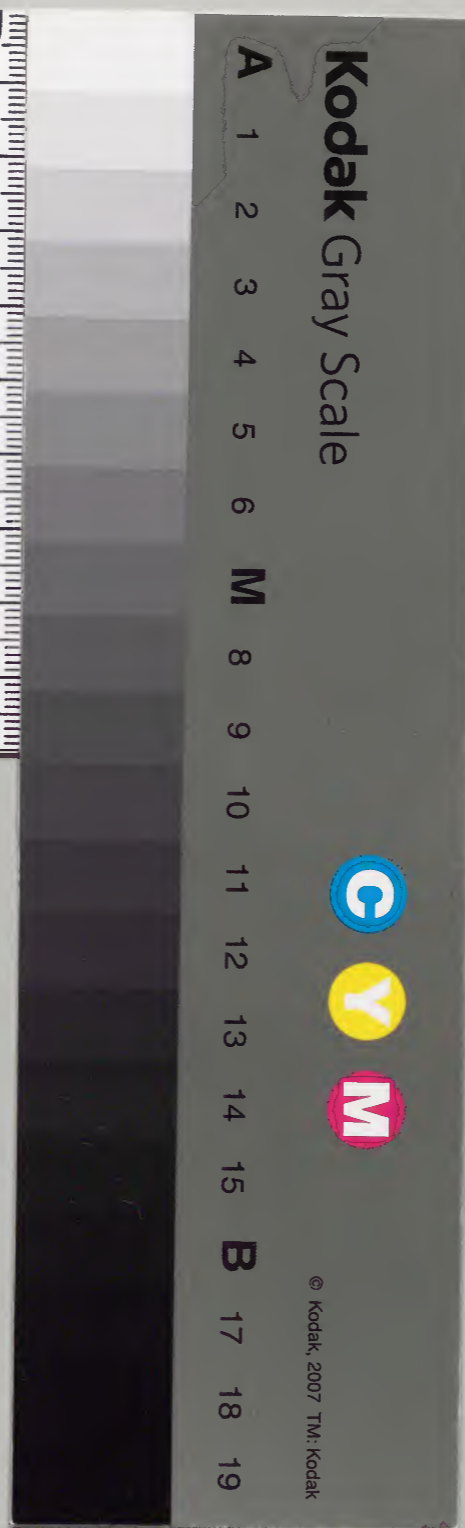
常山紀談

十六

和書門			
四二三〇一	三二	函	號
架	冊	架	冊
一七	冊	架	冊

內閣文庫		和書
四二三〇一	冊	類
架	冊	架
一七	冊	架

內閣文庫	
番號	和 42301
冊數	17 (3)
函號	170 49



備前藩湯淺先生編輯

常山紀談

書肆

千鍾房
宋榮堂 製本

目次

常山紀談卷之十六目次

淺草文庫

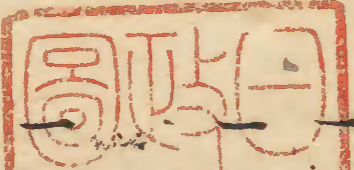
一 浮田秀家八丈鳩へ配流の事

一 小早川隆景遺訓の事

一 佐竹義宣國替此事并車野丹波の事

一 杉原常陸智勇の事

一 前田慶次が事



一 羽國長谷堂合戦上泉主水討死の事

一 伊達上杉陸奥國松川合戦の事 附 永井善左衛門岡野丸内

が事

一 石田が子比僧助命の事

一 越後國一揆堀直寄武功の事 附 千利休が事

十六目次

一 世間太兵衛 伏兵を知る事

常山紀談卷之十六

備前國 湯淺新兵衛元禎輯録

○備前中納言浮田秀家ハ関ヶ原の時一萬八千を帥らして一軍
 敗れし近江の伊吹山小かり落らまじり美濃の白檜村小まじり
 かきつら有し小遂小忍びく西國小落下り薩州よる者まじり不
 其事聞えく 東照宮死罪一等を宥めさせし八丈嶋に
 ぞ流されたるやちやふ苦みく菴竹あたる戸は雨もたまりぬ
 風もぬせぐの黒木此柱を削りて書付らる
 のを焼くもあらず八浦風のとちりやよきおとそへん
 其後芳列公光政朝臣備前よねりて比兒嶋一説西大寺村の高船風ふ
 られしめて八丈嶋よるりて秀家九十餘までながく居

ぐ〜一筋づ〜折〜ハキヤ〜折〜兄弟
心を固く〜相親〜遺言せ〜小隆景其時争ハ
欲より起〜欲をや〜義を〜兄弟の不和〜
い〜元就悦び〜隆景の親〜
秀吉九州を討平〜後筑前五十万石を小早川〜
ら〜小隆景これハ吾〜事なり此頃〜敵なり
身小大國を〜ハ吾を〜非〜九州を〜
為のかり〜謀〜思〜秀詮〜國を譲り倫後の三原〜
この〜

○佐竹右京大夫義宣の士大将車野丹波ハ剛の者〜白練に
火の車を書〜指物〜関ヶ原の乱〜義宣上杉〜心を合せ〜

まうらば

義宣四方の軍を〜水戸の城を〜多珂郡〜到〜これ
上杉の加勢〜然〜父常陸〜義重ハ〜徳川
家〜心有〜バ志〜詭〜義宣も兵を水戸〜
返〜

伏見〜義宣の八十万石を六十万石削ら〜出羽の秋田二十万石
賜〜若〜バ其〜討亡〜べき体〜バ義宣北國
を〜秋田〜水戸の城を奪〜
信名向〜時車野組〜付〜士六人と俱〜新羅三郎
より傳〜城を人〜授〜口懐〜我〜人々
ハ城を枕〜死〜呼〜城中〜か〜入〜を大手〜本多

ラ 等大軍よておろつみ生捕く磔みかけ火の車此指物をくらり
添くを 東照宮より召武家の道を知り老を空しく殺
しつるよと歎くせむひかり

駿府より 東照宮御物諾の序は篤実ある人ハ世は希之
られ年老ぬも多くハ足佐竹義宣其人なり仰
らまを永井右近大夫直勝兼ていふあふや中まを
図り召石田治部と七人の大名と大坂より争論の時義宣
と三成とのやよりあつみ有る三成を打具し伏見来
ア中後三成佐和山は帰る時七人此面々道ゆく討取べし
つらつらとや三河守を添くふ義宣三成を討せんと
生ぐひなるとして道々よりの安をわし其身ハ物具して告

来るを待く打出んと用意有るは是篤実よあはばや
関ヶ原は乱の時も大坂より頼とゆるゆを吾よ其のを告
て何方おも組とぞりき逆乱は興くはあはれども
捨至難く先祖より已来の國を削りて篤実のよ
き事つら及ぶとらども國の存亡よかざるべき事よは
又一思慮有べき事よやとぞ仰らるる

○上杉家の士大将杉原常陸ハ智勇備り人あり 東照宮
宇都此小山より引返させふ対上杉家の軍兵ども大ふり
あつらふ杉原獨眉をひそめて大敵よ恐ましく引返り
とむりハ其人を知ざる初なり 徳川殿諸將をひきお先上
方よ攻上り石田を討まんよ十は八九石田敗小とて其時殿一

人ゆくいで徳川殿は打勝つべき敵國は攻入りて引返し
しつハ味方此不幸なりとぞ云々

杉原白石の城を守りしといづまの時此事や伊達政宗

不意に押寄る事あり政宗此物見の士をせゆり敵はさづ

まり返りし唯町家は火の用心厳しき唯町家の物具

武者杉原うとむほ城門を開けし將机おかり

て待居しついでいひりまは政宗謀有んと恐りて引返し

○前田慶次利大忽々齋と号し加賀利長と従弟なり

一説に利大ハ瀧川儀大夫が妻懐胎し離別し利家の兄

藏人お嫁し前田家よ生るといひり

前田の家を立去る

利大ハ文學を嗜みさ倍ぐ藝事も達せり滑稽の

世を玩び人を輕んぶる利家教訓せし幸度ふ

及べり利大息ついたる萬戸侯しりし心よせぬ

事あまバ四夫も同出奔せんと擧言せしが利家よ

茶奉るべきしついで悦びく茶次が許し来られ

小茶次水風呂よ水を十分きりて湯風呂の

入りんやと横山山城守長知もくし利家よかりあ

し浴所よむる茶次自ら湯を拭くよのんといハ利

家何の心もなくお返りし寒水をきり利

家馬鹿者よ欺まりし引来しついで慶次松風

とい逸物の馬を裏門に引立させし置りし打

の瓢箪ヒョウタン付ツき襟エリまかけ山伏頭ヤマブシトウケン中ナカまで十文字の鎧ヤリを持
黒牝馬クロメウマの金の山伏ヤマブシ中ナカかぐせ唐鍬タウキョウうけうり前田マエタ茶次チヤジと名
乗ノリりかがりくさる水野ミヅノ薙塚ニラツカ守佐美藤田ウツサミフヂダ四人も同く鎧ヤリを
引提ヒラサげおめたさげんぐ念ネンなく敵テキを突退ツキサリけうり杉原スギハラ種タネ鵜ウ
鉄炮テウポウ二百挺小高コタカたあへおのあげうせり物モノうれせうり
茶次下知チヤジゲく引取ヒキトルり

慶次指物ケイジサシモノ移り又大ふへん者とすうり小人コドメをあつり此
事よとていを茶次チヤジ汝ニうちハ武邊ブヅンとよめりやうり落オチ
ぶましく貧ヒツくきまうり大不辨者フブンシヤとりあうりこと戯タラフまうりとうや
上杉家ウエスギケ禄知ロクチ削ケらうり及士イシ多く暇イダヒを取トルく立去タチサリり茶次チヤジを
七八千石一万石を以モて招マケく大名ダイミあり茶次チヤジこれ此度ココロの乱ランは諸大

名表裡ナヘウリの心見限ココロミカヘりり景勝ケイカトあをてこが主君ヌシキミとほべき人なり
扶持フシ一ヒトをきまうり五百石の禄ロクよく民間ミンカンより引込ヒキコ風月フウゲツを
樂タカしみ歌學カガクの心をあせ源氏物語ゲンジモノガタリを講コウじて世を終オハり

○上泉主水カミイヅミモリモト憲元ノリモトハ甲斐カヒの武田タケダ家ケありく劍術ケンジュツの上ウヘより永伊勢エイセイ
が弟イモなりりわまれりり者モノあるが京キョウ北相國寺キョウキョクノクニノテの内ウチに落オチぶる身ミ
をあ居イりを秀吉ヒデタカの時直江ナカエ景徳ケイトクの供トモして京キョウよりわりり傳デン
へつて對面タイメンしははぐ上泉ウヘイヅミをりてなり會津アイヅハ遠國エンコクありと
景勝ケイカト三千石の禄ロクよくあせんとなりりり上泉ウヘイヅミかゝる身ミも三
もよぬ初ハジメを美ウツクくして仕シへりり直江ナカエ出羽デハより押入オシイ時上泉ウヘイヅミも三千
五百の將マサりり寂モカシ上方ウエカタは山の上ヤマノウヘより幡屋ハタヤまで二十四ヶ所ニジュウヨンカ所トコロは出
城シロを設シけりり直江ナカエハ真直マナナカハ山形ヤマナカよりすんで攻セムりり人と謀カり

々々幡屋より春日右衛門よりみある者のかへり忠せ
ん事をいひあぐる直江悦んで山形より兵を押しめ山路よ
かり幡屋よせんといふ軍奉行杉原常陸春日右衛門が一陣
を以て幡屋よせんといふ惣軍ハ山形より攻入るべし人敵我の
利をあはれ嶮岨よそひき入其ひまよ山形の要害を能せん謀
とりへも直江のゆるり杉原と中よりうらばれば我ハ唯易たよ
就んとく崗入むてやがて幡屋を取囲む一時攻め乗破るなり
一説よ長谷堂より内通の事をいひ送るれば直江大よ
悦び多きを杉原長ハ赤松円心ガ白旗の城より新田左中將
を欺きしり謀ありかくいし山形ハ要害をかほん
謀なり只山形より攻入るるといふも用むるは長谷

堂よ押寄る内通の事ハいしりなり直江欺き

そまより出城を只一日此中よ二十一ヶ所攻落しけり山形よ
押寄んとし上泉ガ云山形ハ勝るる要害よく西南ハ沼なりノ
東北ハ石壁よく柵の木七重を矢倉二十餘所よかまへ且義光ハ
先祖より数百年此地よ有士卒よ抱たし者多し力攻めハ
とひもよび所々の小城数多攻取し勇氣を示し軍を
返さし事然るべしと直江あざ笑ひ軍をかせしハ山
形を攻んとめ今更山形の要害よまじバと引退くやや
あは浅黄志ある人の差物さし利根川二本木ハ先陣せし
まはより関東よりを焔し浅黄志ある人を指もの

な〜と笑〜ふも覺えぬ事をいふと罵られバ上泉口惜ま
事ありとぞひそり直江ハ進んぐ菅沢山陣〜〜此処も長
谷堂より十九町あり義光も二万餘の兵をひきよ山形を出る
堂の山北尾崎稲荷山陣と長谷堂よは山形の加勢も来と要
害よ々れバキヤとく攻〜〜討くゆての軍ハ危〜と制〜る
大風右衛門二百討め〜切く出上泉が陣よ向ふ上泉大勢あり
押つ〜みあま〜と戦ひ多〜が大風僅よおあ〜切ぬけ〜
城よ入伊達政宗も軍を出〜先陣長谷堂の城下よ押来陣
を取〜り直江ハ大風を討得〜〜残多〜此城を唯一時よ歩
破〜と下知〜城際よ攻寄〜〜直江さたあ〜お上り石火矢を
透間もあ〜打〜〜尺千雷の落〜〜が如〜志村伊豆懸延戦

前〜を走〜追〜おひ込を相戦〜〜其日も戦ひ暮〜
多〜直江又三千餘を城の後北山よらせ鉄炮を打〜〜バ城
よりと切〜出死傷数を〜〜直江軍兵を〜〜四方を焼を
〜〜たも所〜軍あり長谷堂の城下よ大ある池谷を堰〜
て水をせき港〜〜と覺〜〜バ物見の兵を遣〜又一陣を
焼〜〜〜城の中よりひ〜曾八百討切〜〜バ直江使を以
引〜〜と下知すれ〜〜合〜引退〜使も〜
〜ら〜〜バ次第小軍兵行重〜鉄炮を打合〜〜バ直江杉原
ふ〜〜軍を引上〜〜と云上泉我〜〜め〜〜ハ杉原進む
八年若死人の業引揚〜ハ老年の我よ協〜〜〜同心〜
〜上泉存子細の〜〜い〜あ〜〜馬を〜〜れ〜組〜付

らまゝ大高七左多つ馬を乗付上泉を引とめ士大将の只一騎
まゝかけゆるやうやある有べくもなりしとていふも耳やも笑へど
まゝ大高もつゞいて前田次守佐美民部上泉が陣より一陣の
大将敵より入るをよそふひえしハ士の本意は非ざりしから
まゝいふも進むるもその足も進まば前田をうらめ二十騎
まゝり駐向ふ上泉大高八馬ありたり立向もあつて鎧を打入
突合しつゝ念たう敵を突退け引取んとする所は政宗の兵三
百討核あひより切つておつたまゝ上泉兼く直江が初を怒り
しつゝあま一足も引かんとていふ定めしは又合戦を始め火
出るはよ戦ひつゝ敵味方けり考多し前田守佐美を始め
大剛の者ども数度切つてつゝば政宗の兵三十餘人付まつ

アかゝるまゝは政宗の士大将石川弥兵衛崩れ味方をりて
又おつてつゝ前田已下立ちつゝあつた戦ひつゝ
直江日も暮かり進むつゝとていふと下知しつゝ上泉は
とつひ捨く敵に向ひ上泉主水とつゝ剛の若お取くと名乗か
け死狂ひよ数十人切伏終よそふく討死しつゝ首をハ金原
加兵衛取つてつゝ上泉三十四歳とつゝ上泉主水とつゝ曾の真向よ
礫嵌めどつゝ是より上杉勢乱れ立ち敗北しつゝ義
光政宗勝よそあまはれと追つてつゝ芋川縫殿村上國清四千計
横合よりかゝらんと陣を整へひつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝ
又えつて返り追立てつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝ
前田次守佐美父子物具は立向の箭各七ツ八ツ折つて鎧を

突ゆがめ刀ハカさうらのめく斬なり人馬を般よそくしるが上哀
ぶ組の扱へる前を棄通よそく各大將主水をすて殺しをのこれ
交りハあるべく代大高七左衛門の士なりと罵りて打るがより
答ふ人なりりりあり

○慶長六年四月伊達政宗奥州景勝の地を斬取んと百姓を問者
うしとくもつりを伺まうり松川ハ阿武隈川の枝川よく伊達
領の境なれば本条出羽守其粕備後岩井備中杉原常陸栗生
美濃岡野左内五千計よくもつりて政宗ハ國見峠を踰信
夫郡より瀬の上比川を渉り五千の兵よく梁川の城を押へ
松川をよりて押寄る物聞ども斯と告まば本条出羽城をよ
川を渡してや戦ふ川を前よく半途をや打んとりやをよ

松木内匠敵不意の利を謀て押寄り小味方川を渡りて行くけ
あは政宗多ひふとぐひく必引退くべ兒あり川を渉らんを
よろくなあよりふ栗生同心をば此川中窪よく極めて後以
事きやけくは政宗より人処を半途を打つ利あり岡野
いやく敵大軍なり爰は待んハ敵を恐るるは似たり勇士の
志よ何れはとく川を渡りて待設せんよ栗生孫子小以少
合衆是且北とりあり小勢よく無謀の軍せんハ大敵の擒
とあらんハ必定なりとりやをよ井粕備後杉原常陸もを棄
アヤう物見をせよとく猪俣主膳本庄段右多井筒小隼人
兼行く地帰る猪俣ハ政宗川を渉らんとりよ二人ハ政宗川を
渡さん事半時計りやあらんとりよ子細を問よ猪俣敵馬の香を

取む障泥をそめさば羽壺を常の如く附けりといふ井筒本庄
が云我ホ名了しも回くみされども政宗のまゝ来らば其間五六
町計もやららん政宗川降し押多て其支度せん何の時刻を移
とくま且小荷物を遠く引退しんば戦ひを拵る敵たり政宗
二萬の軍兵を帥く寄来り空しく引退しやうやんとつあま
バ川端二町計並く陣を整へ敵を待んとりあふ岡野ハ切
支丹を信ずる人たるが南蛮人の贈アくる角栄螺とり曹を
署真先くけく川を打渉きて粟生甘粕川を渡るべうと
下知まもども布施次郎左衛門北川圖書小田切所左衛門等ニ
漆汁をくぐり川よき入打渡り守佐美民の鎗を拵る
あ兵をば押とめてりりかまバ政宗押来り先陣片倉小十

即透間もろく切てかゝる岡野四百計志丸ありく鎗を打入
面もろくおめたさげん戦ひくれども大軍小取かきれ左
内僅小打あまき切ぬけく引退く北川馬の首を立直し小田
切は向て唯今付死せん會津はあし十四歳ある吾子を囑り
よ是をかきみ又送りくくさうりくく握る皮の羽折を脱で
小田切は渡りくまバ小田切若万死し一生を得たがバたし送
アムベーとて羽折を腰よきまき北川今ハ七ひ並事ありと
て追くる敵の中よかけ入く切死しりく是をくめと
く帰し合せ火をきぬく戦ひくく者多し政宗勇
進んで追うけく小岡野握る皮の羽織はく鹿毛ある馬
小兼り支へおひくを政宗馬をかけさせ二刀切る岡野あり

顧て政宗の曹此真向より鞍の前輪をうけく切付かへん太刀
曹の志を半くけく研をらよ政宗刀を打折くをば岡野
すくすば右の膝口切付けり政宗の馬飛退てくれバ岡野政
宗の物具以外の見苦しくり大將とハバひもよる續いて
追詰ざりが後小政宗なりと云々今一太刀少く討取べきふ
とて大に悔みたるあり岡野ハ川へ乗入く小政宗又十騎
身ゆく追ひ来アききききききききききききききききき
かきき眼の明く剛の者ハ多勢中へかへさぬのぞとい
ひくはよるを乗上り守佐美兵左衛門十六歳松川の向ひ
の岸ゆく危くききききききききききききききききき
一先ハ川を渉る者を止むらきききききききききききき
名將

の守佐美駿河守の子息はよりよと向ふ民の謀も心より出ん
あまきりききききききききききききききききききききき
ゆきバ心の乱まききききききききききききききききき
とて栗生ハ陣を整へく待りけききききききききききき
川又追ひききききききききききききききききききききき
ハ福嶋をけして引退く福島よゆく行程あり政宗引くもあ
まはあき馬煙を立て追うけりば物具を道に捨る事敷志
ら及息ききて行倒まきききききききききききききききき
ききききききききききききききききききききききき
永井善左衛門ハ世々徳川家仕へり小田原の城を囲き
後いりあききききききききききききききききききききき
十六十三

公トク一ヒト騎ウチゆり一ヒト伊イ達ダテ政セイ宗ソウの伏フク兵ヘイ六ロク人ニン起オキてス包ツツを
指ササ手テ負オヒ刀カタを取トリ落オチせしを取トリ敵テキを追オウ詰メて又マタ討ウチた
あの物モノ師シなり其ソノ後ノチ其ソノ疵キズを向ムカへバ馬ウマふくハまこりと
答コタへしとぞかのぞと功コトふとぬ人ヒトなり後ノチ御ミ旗ハタ本モト
歸カて仕シへし御ミ旗ハタを御ミ善ゼン左サ邊ヘ浪ナミ人ヒトみく上ウ州シウ深フカ谷ヤ
閑ヒ居キしと有アり時トキ人ヒトのいへしと瀬セ戸トの茶チ入ニを秘ヒ藏サウせし
下ゲ女メ老ロ落トしてス折ウチ破ワすぬ下ゲ女メ驚オドロたく日ヒ鏡キョウ臺ダイより
五ゴ倍バイ子シを入レる壺ヒラを名ナ出デし是コノゆゝもかのり小コ奉ホウらんを
用ヨウゆも立タぬ力チカラなまも是コノを精セイ取トすぬ後ノチ小コ堀ホリ遠トホ

江エ守シ見ミてスを打ウチく是コノハ唐タウ物ブツの肩カタ衝ツキなりと新ニ美ミ
後ノチ公キミ小コ奉ホウらんとちの板イ倉クラ勝カチ重シウ頼ネありと六ロク 将シウ軍クン
家ケ御ミとりを御ミ上ウ京キョウ北キョクをり京キョウへ来キらまると
いひ越コまり深フカ谷ヤをゆゝ平ヘイ安アンと趣オモく時トキ浪ナミ人ヒトととも
あひかり名ナ護ゴ屋ヤは親シン族ソクのりと立タちぬると俱トモあひ
ける浪ナミ人ヒト巴ハ刀カタを永エ井キが指サシ替カれ刀カタは取トリ替カへかけ落オチしぬ
永エ井キせんと京キョウよと後ノチ死シ罪ザイの者モノ有アりと試シんと
て刃ハを付ツきてふさびて金カネ色イロも見ミえるとり研トギ師シ刃ハを付ツ
く此コノ刀カタの如ニた刀カタハ刃ハ曾ソウとり心ココロは覺オぼといふ斬ザ罪ザイの場バで
あら身ミの者モノ有アりと切キりぬるとにかの永エ井キがさび刀あらく
切キりぬると物モノは障サハ事コトあたり似ニたり能ヨシ研トギくカれバ
十六千四

さきまゝの物も銘ハ正宗と切り本阿弥とすれ
バ正宗の中にも最も最上の物なりといへり是も 將軍
家子奉りて永井正宗と号せられしものなり

始とて大剛の老いも馬を走らせしハ追ちりしとつとて
てハ突ちりし後殿しあり青木ハ小丈あるるふ兼柄の短き
鎗ありしを殊に急ぎたり幾度ともなく支へ戦ひたり其相備
後ハ上杉家より勝まり勇將あるる白石の城をせりし會
津より行きて跡ゆく登坂逆心しり白石を敵に取まりし事
を口惜く思ひしハ今日とて記しりしはぐり取てかへて
追退け勇氣をあらしめし福島の城下北川を渡り時政
宗の兵跡追詰りしとて先ずし川より入るるが永井を後よ

三刀切る永井度々の軍に戦ひ疲れ大軍打渡り川音もま
まれ此をあらば青木ハ鳥毛此棒のゆりありし黒たわらけ
しるが兼柄と敵を追拂ひ川岸より打あがりし永井は斯く
しるが驚馬たてて従者よりしりしハあらし三刀鞍も刀の痕あ
りし永井は助けられしとて一禮をぞ述べりし小田切を
敵より圍まきありしや討たれしとて青木又かけきて敵を
追拂ふ岡野ハ旗もたて静に福島の城より入其粕栗生も引
入りしバ政宗やがて押寄しりし殿に兵ども柵を踏破り城に入
りし青木ハ柵を越りしりし只一騎ひり居しりし政宗馬
を駈まかりし青木十文字の鎗ありし政宗此曹の立物三日月を
突折しりし政宗馬は諸鎧を合せしりしわけ通らまぬ青木後

政宗とて今一鎗ゆく突殺もてさよ口惜き事とてぞりひ
りるかゝるまゝは築川の城より須田大炊助長義討つて出政宗の
兵阿武隈川を前陣に置くが此川奥州第一の大河なり
須田ハよく地の利をとり兵を二陣よりうち須田ハ川上小舟上
アツクを置く政宗の兵二ツハ分まて防ぐと色めくおを
文字不渡しく斬る敵敗北し物具を始め多く分
捕ふせし中ゆも伊達家お侍へ幕を須田宇平次中村仙右
重奪取てり須田今年二十三あまより武名殊ふせ高
く閑えたり政宗ハ松川ゆく後敵出たり引退く如を
本庄越前又かけゆく川を渡し追うけりまて政宗敗北し信
夫山に掛り引退く時景勝後巻ふ打ゆく緋地は日の丸

旗山の上に見えり政宗とて物もとり仙臺小引退き
まより後政宗使を以て攻取り白石の城と幕と取換ん
と云送らるるは景勝ゆく白石の城ハ鋒ゆく攻められ
幕も亦吾士卒の骨折る取得りハ重く幕をも鋒めて取返
さるる後小城一攻落さるるハ恥あるは昔
より名持も城を敵に攻落さるる事あるは武具を
取まき事ハ弓箭とる身の大きを取られバ政宗我をさる
さく斯云くたつと笑はるる
台徳院殿上杉の館に
御出有し時かの九曜北幕法華經の幕を厩よりとれしと
ぞ其後政宗岡野よりより時松川の軍に有松語り
と汝を斬つるハ日下よりおをとりは岡野大将の

刀の跡と存りて金糸よて縫あせ世家の宝とせん^イと存るよし
いひく羽折を改字よ見せされば政宗悦む^{ヨロコブ}其時岡野曾の志
ころを吹返^{フキカエ}しけくならん切^キはま^マと申^{マウ}るま^マバ政宗色
を變^カト物語を止^トら^マし^マと^マや

岡野ハゆや蒲生家の士なり^{ウツキ}が上杉家よ仕へり富
有^イある人ゆ^ケく儉^{ケン}を好^コむ奢^カをふ^クむ一月の間二三度も金
銀を山の如く積^{ツミ}て其中よ卧^シくた^タぐ^グみ^ミと^トり^リるをゆ^ユめ
人^{ヒト}そ^ソと^トあ^アへ^ヘり或時岡野^{ウツキ}より此如く金銀を並^{ナラ}べて見
居^イたり^リふ近^{チカ}きゆ^ユの士あ^アる^ルを志^シ知^チり^リ方人の者^{カタウタノモノ}
どもあ^アまの^ノか^カけ^ケま^マり^リと^ト岡野^{ウツキ}ゆ^ユく^クい^イる^ルあ^アや^ヤ正宗^{マサムネ}此
刀^{カタ}を^サ提^テて^シま^マり^リ一日^{イツニチ}一夜^{イツヤ}其家^{イノイ}よ有^アる^ル事^{コト}能^ノく^クあ^アら^ラむ

て歸^{カエ}り^リ密^{ヒソカ}に^ニ馬取^{ウマトリ}の下^{シモ}に^ニ大板金^{オオイタキン}一枚^{イチイモチ}持^{モチ}り^リと^ト笑
及^{およ}び呼^{ヨビ}出^{イダ}して^シ汝^{ナニ}が志^シを^ヲや^ヤり^リと^ト人^{ヒト}ハ貴^キ賤^{セン}よ^ヨあ^アら^ラむ
貪^{オン}く^クして^シハ義^ギ理^リのな^ナら^ラむ^ム事^{コト}も心^{ココロ}を^ヲう^ウり^リま^マく^ク叶^{カナ}ひ^ヒが^ガじ
よく心^{ココロ}が^ガや^ヤると^ト云^イて^テ黄金^{オウゴン}百^{ヒャク}兩^{リョウ}共^{トモ}一^{イツ}つ^ツり^リ景^{カゲ}勝^{カツ}會^エ津^ツよ
兵^{ヘイ}を^ヲ起^{オキ}す^ス時^{トキ}永^{エイ}樂^{ラク}錢^{セン}一^{イツ}萬^{マン}貫^{カン}文^{ブン}を^ヲ獻^{ケン}ト^ト朋^{トモ}輩^{ハイ}の^ノ親^{シネ}よ^ヨ深^{フカ}き
人^{ヒト}ま^マふ^フハあ^アら^ラむ^ム黄金^{オウゴン}を^ヲう^ウり^リま^マり^リ送^{オウ}り^リと^ト軍^{イクサ}の^ノ志^シを^ヲう^ウり^リま^マり^リふ^フ人^{ヒト}を^ヲハ
ひ^ヒめ^メた^タま^マす^スとも^ト岡野^{ウツキ}ハ^ハ猿^{サル}樂^{ガク}よ^ヨ舞^{マヒ}を^ヲど^トれ^レと^トく^クま^マり^リと^トい^イふ^フ人^{ヒト}
よ^ヨ語^{カタ}を^ヲく^ク日^ヒ比^ヒハ^ハ武^ブ備^ビよ^ヨね^ネと^トい^イふ^フ猿^{サル}樂^{ガク}とも^ト世^ヨの^ノゆ^ユと^トい^イふ^フ
時^{トキ}ハ^ハ諸^{シヨ}方^{ハフ}小^コま^マり^リの^ノ暇^{イダヒ}を^ヲ今^{イマ}人^{ヒト}を^ヲあ^アら^ラむ^ム事^{コト}の^ノゆ^ユで^デか^カの
者^{モノ}ども^トい^イふ^フゆ^ユめ^メた^タま^マす^スバ^バ玩^{マシ}や^ヤま^マり^リと^トい^イふ^フ軍^{イクサ}小^コ臨^{リン}む^ム者^{モノ}生^イて^テ帰^カへ
ら^ラんと^ト思^{オモ}は^ハだ^ダされ^レバ^バ今^{イマ}生^ナの^ノ樂^{タク}よ^ヨと^トい^イふ^フく^クな^ナら^ラむ^ム事^{コト}と^トい^イふ^フ

ぞ云々又政宗福島フクシマの城を攻めんゆて木幡コハタ即左馬
百騎討ふ城近チカく働ハタきたり岡野井樓セイロウより見大物見
あまきと三陣より討取りて八軍を心懸ココロカケりて兵をせむべ
らばといひりて小鈴木彦九郎スズキヒサノブよせ来り申マウ政宗有べ
くひとめく討取んとといハ尤モトモとて兵をせむ先陣二十騎
討次の陣ツギよひりてふたんととめく西を鉄炮テツポウを打ち煙
の下タよと左内サナイ一文字イツモンジを切て掛カと遂ツよ木幡コハタを討えくれ景
勝度カサ々の功を賞ニヤウし謙信武功ケンシンブコウの聲コエ小姓名コナナをあへらり例
あより左内サナイを越後エチゴと更められり政宗三万石サンマンシヨクをせよ
まうらども舊主キウシュの好ヨシと忘ワスまがごとて蒲生秀行ハコフヒデユキ仕シへ楮
苗代ナボの城ノ有下野守忠郷ゲノモリノケノタカの時死トキシりて金子三千兩カネノミヤ正宗

の刀カチを遺物ユイモノ小猷コタカト忠郷タカの弟ニ中務ナカニヤウあも金子三千兩カネノミヤ景光
此刀コノカチ貞宗サダムネの小脇指コノワキサシをかきみよのせり年頃トシゴロ人ヒトあか
々タタ金銀カネギネ此手形コノテカタ證書シヤウシヤクの大オホ箱ハコありて皆焚ヤキまてり

○関ヶ原セキガハラの亂ミダレをきまりて後 東照宮本多正信トウショウミヤモトマサノブを召メシて石田イシダが
子妙心寺コミョウシンジ此内永壽院コノウチノエイジュインが弟子デシあく僧ソウとなりて寺中ジナカ二回ニヘて
重罪オモシの人ヒト此子コノコあまきも幼コき時トキより出デたれりて者モノあれバ救コルさ
まはれりといふいふと仰オホ有アりて正信マサノブとてあも御救ミコルされの有アり
べき事コトよん治部チブハ徳川トクヱンの家イヘよ大功オホコウをたれりて者モノあり治部チブよ
しあは軍イクサを起オコし西國中國サイコクチュウゴクの大名オウナミナをかきひりひり一戦イツセン
よあ負ウツりて故コトあてて日本ニホン六十餘州ロクジュウ皆徳川家トクヱンノイヘよ帰服キフクりて

り治勢が存立しよりかく日本八從ひぬまは徳川家子大功を
成しむる小ハルハバヤとキタマシバ 東照宮汝が理屈もささる
なりと仰らましくかの僧御ゆもそれを蒙りたれば岡谷美濃
守宣勝懇よして和泉北岸和田まで終りたるとうや
○関ヶ原の乱北時越後小一揆起り堀左衛門督秀治が臣小倉
主膳が下倉の城を責る堀監物が子丹後守直寄坂戸の城
わくかくとや後巻よかけ向ふを敵引とて坂戸を攻ば
如何あんと云りの有直寄いまも下倉を救はば敵此城を
攻来らば敵北旗先をさす小見ぞ口惜るべしといふありを
やく打出く下倉向へハ小倉も門を開て切く出直寄後より
一文字は突あがり一揆北長由丸右京を打取り此告を坂戸

あて書さる耐勝利を得んとまをさすといふあり
あざとあひ打まげば戦場の土ともなると云くやと云く一揆
柿崎齋藤已下五千計杉山より前平田をのぞく陣に
ハ直寄昔太閤の前もく允長老の孫子をとまをさすといふ兵
以正合以奇勝といふり吾々奇を以て軍とて山に敵馬
速水鐵終よるを渡り直寄ハ六百計引分る林の中
待居り一揆馬印をさす進来る時林の中よりさす
出直寄真先よすみく思ひもぬ不意を討一揆二百餘
討取く切崩しり 東照宮御感状を賜りぬ此年二十四才
とや後小十方石を賜り
直寄ハ秀政の長臣堀監物直政の次男あり十三歳まで倍臣

太閤タカウの小姓コシヤウ召メされ左右サイウをささげし寵臣チヨウジン也
初ハジメ三十郎サンジウラウといひりしが後丹後守ノチノタニノリと称ナヅケされ太閤タカウある時トキ茶室チヤシツへ
入イて火ヒをとり炭スミを入イる時トキ千利休チリキウが幽霊イウレイあつて来て黒クロた
頭カ巾キンをかぶり爐ロのかくへは座ザし居イるが眼メの中ナカより光ヒカリ生ナじ
息イキは火ヒを吐ハく左右サイウは有アる侍女ジヤウナリ恐オソまあへるよ太閤タカウ炭スミを入イ
終ハシり無ム礼レイなりとてささげしとて召メされバ利休バリキウが形退カチノシて坐マ
す太閤タカウ常ツネの居間キマは出丹後守ノチノタニノリをよんてささげしお数寄オシキヤ屋ヤは有ア
志シくり来キてといひりし直寄ナホヨリ今年コトシ十五歳ゴトウサイなり即ソレトキ時
廊下ラウカの窓戸マドを閉トめてすき屋ヤへ入イりて何ナニもは
歸カりて斯カクといひバ羽折ハハシをあへらる利休リキウハ茶チヤの湯ユを好ヨミく
世ナ小名コナあり天正十八年テンセイハチヤウネン秀吉ヒデキヨ南禅寺ナンゼンジより黒谷クロヤへゆりて

山ヤマぎハの道ミチより女房メヤウの下シモ終ハシりて持モせ山ヤマに花ハナをたが
めく静シズ小来コキアリて秀吉ヒデキヨの先サキをひの者モノをさへく花ハナの木陰キノカゲは
立タかまきりてささげし美ミ麗レイなり松マツ向ムカふ利休リキウが女メ
房ヤウ、鴟トビ屋ヤは嫁ヨメ今イマハ獨住ヒトリヂある由ユゆきと云イハふ仕シへささげし志シひ
てよびおきし小夫コウフより後ノチ悲カハしその涙ナミダ乾カラふべとて
従ツグふ利休リキウは志シひらきし女メを商シヤウひしとて人ヒトをいれ
んが口惜クチヲシしとておきし秀吉ヒデキヨ利休リキウをいふれし利休リキウ木像モクザウを作ス
て大徳寺ダイトクジの山門サンモンに置オキて太閤タカウ山門サンモンハ天子テンシを始ハジメとて通トホらせ
る頭カ上ウヘより志シひする事コト無ム礼レイなり且カシヤ茶チヤの器キ此コノ價アタヒ小コ物モノ私シ有ア
るといひて天正十九年テンセイジュウユウネン二月ニグヒ利休リキウを誅チウせしれり利休リキウ小座敷コザシキ
小茶コチヤの湯ユをささげし茶チヤの湯ユ終ハシりて

